

岩倉紙芝居 古典館 宰主 上田啓之

神功皇后紀までにおける「倭（やまと）」について

そもそも自分たちの地をどう呼んだかといえば、国生みにおいて、「大日本豊秋津洲、伊豫二名洲、筑紫洲、億岐洲*、佐度洲*（*は双子）、越洲、大洲、吉備子洲の大八洲國を生む。大日本（おほやまと）【日本 此を耶麻騰（やまと）と云（いは）く、下（しも）皆（みな）此に倣（ならふ）】」あるいは、神代紀においては、豊葦原（とよあしはら）千五百秋（ちいほあき）瑞穂（みつほ）之地（くに）、簡略して、豊葦原中國（とよあしはらのなかつくに）という表現となる。

神日本磐余彦尊（かむやまといはれひこのみこと：神武天皇）のごとく、天皇の名前で”やまと”を付す場合「日本」が用いられる。「大日本彦耜友天皇、日本足彦國押人天皇、大日本根子彦太瓊天皇、大日本根子彦國牽天皇、稚日本根子彦大日日天皇」「小碓尊 亦名日本童男（やまとをぐな）亦曰日本武尊（やまとたけるのみこと）」

倭が“わ”と訓じられることはなく“やまと”と訓じられるが、最初に登場するのは、椎根津彦（しひねつひこ）、倭直部（やまとのあたひら）の始祖（はじめのおや）とあり、これは、「倭國の磯城邑、磯城の八十梟帥有り。」と同じく、地域的なもので奈良盆地をさしている。「珍彦を以て、倭國造と爲す」「倭國の豊秋狹太媛の女、大井媛」「倭國香媛、倭迹迹日百襲姫命、・・・倭迹迹稚屋姫命を生（あ）れる。是より先に、后、・・・、倭彦命、・・・を生れる。」「倭迹迹日百襲姫命、大物主神の妻と爲る。」「倭直の祖、長尾市・・・大倭直の祖、長尾市宿禰」「天照大神を以て、豊鍬入姫命に託け、倭の笠縫邑に祭る」「天照大神を豊耜入姫命より離ちて、倭姫命」「倭の狹城池及び迹見池を作る。」「使者を遣して白鳥を追ひ尋めぬ。則ち倭（やまと）の琴彈原に停れり。」「伊勢より倭（やまと）に還へり、纏向宮に居す。」「大足彦天皇を倭國（やまとのくに）の山邊道上陵に葬る。」「挾抄者（かぢとり）倭國（やまとのくに）菟田人（うだのひと）伊賀彦。」用例からすれば、倭國といっても日本全体ではなく奈良盆地の国を想定している。「夜摩苔波（やまとは） 區珥能摩倍邏摩（くにのまほらま） 多多難豆久（たたなづく） 阿烏伽枳（あをかき） 夜摩許莽例屢（やまこもれる） 夜摩苔之于屢破試（やまとしうるはし）」この夜摩苔も倭と同じ意味である。

倭で少し違った用例は、「倭大神、穗積臣の遠祖、大水口宿禰に著りたまひて、誨へて曰はく、“太初の時に期りて曰はく、『天照大神は、悉に天原を治さむ。皇御孫尊は、専に葦原中國の八十魂神を治さむ。我は親ら大地官を治さむ。』”」「天照大神、倭大國魂、二の神を、天皇の大殿の内に並祭る。」「日本大國魂神を以て、淳名城入姫命に託け祭ら令む。」倭大神＝倭を使っているが実質上は日本である。

奈良盆地の別称は、「中洲（なかす）の地（くに）」である。伊奘諾尊が此國を「妍哉（あなにや）乎、國之獲る矣、内木綿（うつゆふ）之眞迄（まさき）國と雖も、猶し、蜻蛉（あきづ）之臀帖（となめ）の如く・・・秋津洲（あきづしま）」とも称した。

日本全体としては、「(伊弉諾尊が) 浦安 (うらやす) 國、細戈 (くはしほこ) の千足 (ちだる) 國、磯輪上 (しわかみ) の秀眞國 (ほつまくに)」復、大己貴大神が曰はく、「玉牆 (たまがき) の内つ國」。及び饒速日命に至りて、天磐船に乗りて、太虚を翔行く也。是の郷を睨りて之に降り、故に因りて之を目標て、「虚空見つ日本の國 (そらみつやまとのくに)」とある。

対外的に日本全体を表現する場合は、「天日槍對へて曰く、“僕は新羅國の主の子なり。然れども日本國に聖皇有すと聞りて、”」「吾聞く、東に神國有り。日本 (やまと) と謂ふ。亦聖王 (ひじりのきみ) 有り。天皇 (すめらみこと) と謂ふ。」「日本國 (やまとのくに) に降 (まつる：降服)」變則として「日本國 (わがみかど) に貢 (たてまつる)」というのもある。

神功皇后紀までの用例からすれば、倭も日本も“やまと”であり、天皇と日本がセットであり、倭の呼称は神日本磐余彦尊が敵対する対象を、倭國の磯城邑、磯城の八十梟帥と称するごとく、すでに存在し、地域が奈良盆地に限定されたものである。饒速日命が虚空見日本國と称したところへ乗り込んだことから、“やまと”の呼称があったことになる。中国人が倭を“やまと”と発音することはありえず、万葉仮名では夜摩苔、夜麻登、夜萬止、耶魔等、夜麻等、野麻登に類する文字であり、その地を指す音は“やまと”に近いものであったことは確かであろう。山門の門“と”は甲類で前記の“と”は乙類で異なる音である。

しかし、表記上、倭を省くことができない事情があった。自らを倭と称し朝貢を求め、また「漢委奴国王」、「親魏倭王」と称された歴史から逃れることはできない。漢書に倭、地理志に倭人、後漢書、光武帝紀に倭奴、魏略に倭、魏志、隨書に倭國とあり、倭から逃れることは出来なかった。“やまと”とは必ずしも一致しないが、倭を“やまと”と訓じる必要性があった。そして、“やまと”を日本と表記しなければならない外交上の配慮から、音とは関係なく日本、倭の使い分けがされるようになった。名義抄に倭、倭歌 (やまとうた)、倭琴 (やまとこと) とみえるように、伝統的なもの、先にみた人名、地名に付される場合には倭が用いられるように思われる。

“やま”とは地表に高くそびえた地勢、人の住む里に対して、人の住まぬところ、神の住むところという観念。“と”は外、門、戸は甲類、乙類となるのは、“ところ、所、処”“とき、時”の場合の“と”。“と”に乙類が用いられている場合の“やまと”は「神の住むところ」の義となろう。“と”に甲類が用いられている場合、“と”に字義がある。山門となれば海水につかっていた時代の大阪平野から奈良盆地に侵入する場合、生駒山系が門のように守っている地形をさすことになる、内外、区画相互の間を遮断するもの、地勢的に出入り口になっているところをいう。山溪の間をさすこともあり、奈良盆地の地形そのものをさすことになる (字訓)。湖水を埋め立て造られた奈良盆地は「中洲」とも称される。マオリ語「イア・マト」の転音で「大きな、深い沼地」の義という解説もある (大和国)。倭の字義は、説文に「順 (したが) ふ兒 (かたち) なり」、と委隨の意に解する。委は農耕儀礼において、稻魂を象る禾を被って舞う女の形。倭はその低く舞うさまをいう語である。わが国の名に、その字義を用いることは考えがたい。倭の古音は iuai で、自称の代名詞の「わ」に近い (字訓)。

日本人にとっては、倭とは渡来人が来ようが縄文の時代から日本列島に住んできた人種と考えるが、大陸や半島の人間には別の認識がある。山海経では、「蓋國は、強大なる燕の南、倭の北にあり。倭は

燕に属す。朝鮮は、列陽の東の海、北山の南にあり、列陽は燕に属す。」とある。燕(全盛時代は昭王(BC311～279年在位)の頃)の南(地図)は大陸内で、朝鮮は陸続きであるが東海を隔てていることになる。燕や遼東、半島は中原での動乱から避難をする地、北方ツングース系の南下する地であり、周が殷を滅ぼした時、殷の箕子が遺民をひきつれ朝鮮を建国した(BC1100年頃)。周が乱れ、楚と呉、あるいは呉と越の抗争の時代(BC580～470年頃)に敗れた呉人や越人が、船で山東半島經由海を渡って、あるいは陸伝いに半島へ、あるいは日本列島に渡った江南系集団があり、水稻耕作、金属器を伝播させたとされる。これら大陸や半島の集団も倭とされ、必ずしも日本列島在住者に限られるものではない。秦が中国を統一したとき(BC221年)、趙や齊、衛のゆかりの者、漢の時代(BC202年～)には秦のゆかりの者も逃れてき、これらのなかから、上記第二次の伝播経路にあたる渡来がおこなわれた。秦代には、徐福集団が日本列島に來訪したとの伝承もある。これらのことは、萬遜樹氏の「古代朝鮮・韓民族の形成とニッポン」や宝賀寿男氏の「鳥トーテムをもつ秦王室とその族裔たち」に詳しく論じられている。

新羅の建国には渡来してきた倭人瓠公が大きな役割を果たしていた。瓠公一人ではあるまい。半島における倭人の存在が圧力として認識されてもいたようである。中国ではこの時期、漢が乱れ王莽が新をAD9年に建国する。倭の奴国が後漢の劉秀(光武帝)に朝貢するのがAD57年であった。

これらの倭が“やまと”とは直結しない。魏志倭人伝の倭と邪馬壹【臺】國は異なる。魏志倭人伝では倭人から始まり、魏略は「倭在帶方東南大海中 依山島爲國 度海千里復有國 皆倭種」倭=島國であるが、魏志倭人伝は、「倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑 舊百餘國 漢時有朝見者 今使譯所通三十國」と倭人が國邑をなしている百餘國のなかで中心的な國として邪馬壹【臺】國を表記している。“やまと”と邪馬壹【臺】が直結するかといえば、ジャメイチ、ジャメダイあるいはヤメイ、ヤメト、似ているがそのものずばりではない。邪馬臺の臺を台“と”乙類として合致させている。

書紀編纂の時代は、日本を強調する気持ちが非常に強い。

2008. 02. 15